米欧回覧

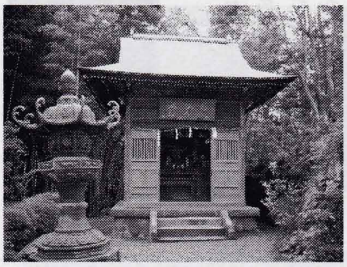
第２８号
発行
米欧回覧の会
編集
メディア部会

「七賢堂と滄浪閣を訪ねる」
大磯歴史ツアー、大盛況！

大磯の吉田茂邸とその邸内にある七賢堂を訪ね、さらには伊藤博文の居宅だった「滄浪閣」で食事をするという趣向の今年の歴史ツアーは、澤田美喜記念館の見学というおまけもついて、大変楽しい、充実した、「日本の近代を学ぶ」一日となった。

これには大磯在住で伊藤博文のご子孫でもある永富会員の格別のご尽力と吉田茂財団理事長でもある大久保利泰氏の特別のご配慮によるところが大きく、参加者からは感謝の言葉とともに、「さすがは米欧回覧の会だ」との声があがった。

幸い天候にも恵まれ、いつもながらの浅沼、山田両幹事の懇切なお世話ぶりもあって、思い出に残る大盛会の歴史ツアーとなった。（詳細は四～五ページ）



吉田茂邸内の七賢堂

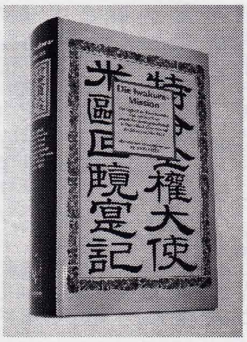
松本健一氏の講演
熱気を帯びる！
（七月の全体例会）

「開国・維新」、「佐久間象山」ほか多数の著書がある作家、評論家の松本健一氏の講演は、綿密な調査にもとづく実話、エピソードが豊富で、歴史が生き生きと語られ、まるで講談をきくような面白さがあった。

「歴史は物語である」とする松本説がそのまま会場を圧し、参加者はみな時間を忘れて聞き入った。当会恒例のブンブン方式の質疑では、あまりに質問が多くまた多岐にわたり、その一部にしか応える時間がなかった。そのため、本題に深く踏み込むだけの余裕がなく、その点は少し心が残った。

という次第で会場は熱気にあふれ、松本健一氏には是非またの機会においでいただき、じっくり続きのお話しを伺いたいとの声がしきりであった。（詳しくは二～三ページ）

「米欧回覧実記」のドイツ語版、出版！



「米欧回覧実記」のドイツ語圏三カ国、ドイツ、オーストリア、スイス編のドイツ語訳が、出版された。（右写真）

この仕事は、かねてよりボン大学のペーター・パンツアー教授によってすすめられていたものだが、このたび写真のように重厚でエレガントな装幀の、六百五十ページに及ぶ堂々たる本として出版された。

そこには、内容豊富な注がつけられており、各種新発見の資料も含め興味津々なものがある、その和訳が早期に待望されるところである。

「座食する穀潰し」の大処分
命懸けの覚悟

泉　三郎

岩倉使節が「米欧回覧」の旅を続けている間、留守政府では「廃藩置県」に伴う事後処理に懸命だった。とにかく「廃藩置県」は三百の大名の首を斬り、士族卒族など二百万の失職につながる巨大構造改革である。難題は山積し、抵抗勢力もまた強大だった。

大蔵少輔の吉田清成がワシントンに派遣されたのも、その資金対策であり外国から借金をするためだった。総額三千万ドル、内一千万ドルが華士族の家禄処理のため、二千万ドルが鉄道ならびに鉱山開発のための投資資金である。

留守政府は、使節団が米国訪問中で大歓迎を受けていることが外債募集に好都合と判断したのだが、現実にはそうはいかなかった。駐米公使役の森有礼が西洋かぶれの論理でこれに猛反対し、日本の代表にもあるまじき妨害作戦に出たからだった。吉田は森のはねあがりぶりにほとほと困惑し「あきれはてた幼稚な愚論」と非難したが、そのため米国での募集を諦めて早々に英国にわたることになる。

華士族の家禄は、明治四年の数字で、総予算四二四七万円の内一六〇七万円、実に三十七％を占めており、新政府は「座食する穀潰し」たるサラリーマン華士族をばっさり処分する必要があった。

さて、今日、「座食する穀潰し」はいないか。中央地方の公務員、特殊法人とその関連、保護の厚い金融機関などに、ゴマンといるではないか。

結局、明治政府は開発資金の二千万ドルは断念し、吉田は秩禄処分一千万ドルの外債募集に成功し、政府は大処分を断行していくことになる。

維新政府の矢継ぎ早やの大改革の原動力は何か。やはり「命懸けの覚悟」という他はない。平成日本のリーダーも、本気で構造改革をやるつもりなら、この目の覚めるような先人の勇気と断行力に学ぶべきだと思う。

7月例会講演

「第三の開国と幕末維新」

講師　松本健一氏

七月二十七日(土)午後一時三十分、神田一橋の学術総合センターで七月全体例会が開催された。会務報告の後、午後三時から松本健一氏の講演が行なわれた。

先ず会員の鈴木幸夫氏(麗澤大学名誉教授)より講師の詳しい紹介があった。

松本健一氏は、現在麗澤大学教授、幕末以後の近、現代史を中心に九十冊を超える著書がある。主な著書に、『北一輝の昭和史』、『昭和天皇伝説』、『幕末の三舟』、『白旗伝説』など。

講師を紹介する鈴木幸夫氏

●講演要旨

私は通史と言うものを書いたことがほとんどない。歴史とは物語であると考えており、従って、自分を歴史家とも思っていないし、歴史学会にも入っていない。それどころか昨年来、歴史学会と白旗伝説を巡って大論争をしてきている。『白旗伝説』について詳しくは私の著書(講談社学術文庫)を参照していただきたいが、一八五三年ペリーが来航した時のことに話は遡る。白旗については、沖縄戦争のとき、白旗を掲げた少女の有名な写真があるが、あの少女は、白旗を掲げれば撃たれないということをなぜ知っていたのだろうか。日本において白旗は源平の昔から源氏の旗であり降伏の旗ではなかった。資料によれば、一八五三年六月四日ペリーが浦賀奉行に手交した第三の書簡に、日本が開国しないならば戦争になるが、もし降伏するならばこの白旗を使えと言って、二旒の白旗を送ってきたことになっているが、このことを証明する資料とその解釈を巡っての論争であった。ペリーの来航は力により開国を迫ったものであって、当時の日本と米国の差は、大砲一つとってもその射程距離は八百メートル対三～三.五キロの差があり、戦力はケタ違いであった。力でする外交、所謂「砲艦外交」であったと言えよう。

講師の松本健一氏

日清戦争における勝敗は何で決まったか、保有軍艦の総トン数に五十対九の差がありながら、戦争物資の調達や、人材の教育、補充を自国で行いえたか否かにより決まった。物を作り、その原理を理解し、それを更に応用、改良する技術力の差と言えよう。信長の時代、当時の人口一千六百万人に対しキリスト教徒は百万人いたが、キリスト教徒は、現在でも百万人である。この様に、異文化を取り入れ、日本化させる力や、外からの新しい力をねじふせる力を日本は持っている。(儒教の国、韓国のキリスト教徒は人口六千万人に対し二千万人と言われている。)

第二の開国を、太平洋戦争の時代とすると、これは国際法のなかった時代と特徴づけられる。国際法への言及のないまま始まった戦争であったが、国内で国際法を意識していたのは昭和天皇であった。マレー半島作戦において中立国タイに侵攻してマレー半島を攻略する作戦に、国際法違反として反対した。満州事変以来国際法が存在しない侵略戦争の時代であったと言えよう。

第三の開国は、一九九〇年代に入り冷戦が終わり、パワーゲームは経済戦争(ウエルスゲーム)となったが、この時代はナショナリズムによる局地戦争の増加、世界的にはグローバリゼーションが問題となり、資本、経営、労働などの資源に国境が無くなり数字化される部分は世界が一つになった。しかし、シンガポールという国はあるが、シンガポール人という民族はいないことで見られるように、ナショナルアイデンティティーとは何かを明らかにし、将来への国家デザインを示すことが必要となってきている。グローバリゼーションの日本語はなんであろうか、八紘一宇がそれに近い。このような時代にあって、最も大切なことは、国家指導者が、国民が痛みを分かち合っても将来に希望がもてるような、しっかりした国家デザインを示す事ではないだろうか。

●質疑応答

講演後、司会より、各グループでブンブンミーティーングをしていただき質問を取りまとめてほしいとのコメントがあり、その後講師との質疑応答を行った。

【主な質問、要旨】

一：開国とは何か、維新の改革には日本伝統の物作りの力が生かされたとのお話であっが、第三の開国の今後はどうなるのか。

二：白旗は現存するのか、使われたのか。

三：幕末の日露領土交渉と現在の北方領土問題との関係は。

四：織田信長時代に百万人いたといわれているクリスチャンをねじ伏せる力のある民族といわれたが、どうすればその力を取り戻せるか。

五：維新から吉田茂までの七賢人のうち誰が一番国家に貢献したか。

講演会場（学術総合センター）

六・アイデンティティーとは教育の問題と思うがいかがか。

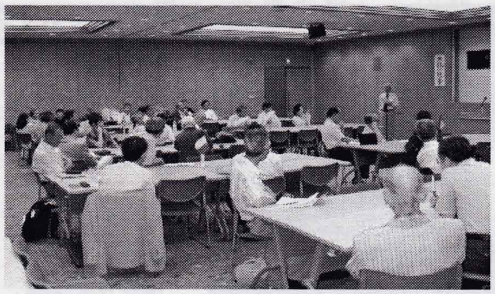
七・支那事変とは何であったのか、現在の日中問題との違いは、農薬問題をどう見るか。

八・日本の進路を決めるものは結局教育と言える。大人たちの問題でもあるし倫理問題でもある。物作りの考え方は、現在ナノテクなどに生きていると思うが、これらは国内プロジェクトになりうるか。八紘一宇と杉原千畝の難民救済は結びつくか。白旗の少女とその真相は。

九・明治時代から太平洋戦争に至るまでの日本の外交は、何故縮こまったのか。第三の開国におけるナショナルアイデンティティーとは、ナショナルデザインとは何か。日本の国にもターニングポイントはあったはず、それは何時だったか。

十・ナショナルアイデンティティーとは教育である。日本は市民社会が未成立、個の自立なし。ゴーン氏と日本企業のグローバリゼーションについてどう考えるか。リストラし、企業文化をつぶした上で再構築する必要があるのではないか。シンガポールの人々はすでにグローバルなコミュニティーとして、自国を認識していると思うが如何。

十一・今日の話には天皇制との関係についての言及がなかったが、コメントは。


7月例会（学術総合センター）

【松本氏応答】

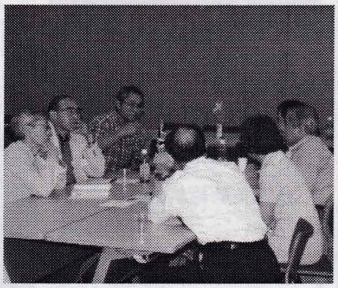
質問全部にお答えするのは時間的にも不可能なので、いくつかの点についてのみお答えすることでお許しいただきたい。

白旗は文久初め、江戸城の火事の折焼けたと思われる。証拠はない。日本で最初に白旗が使われたのは、戊辰の役、会津開城のときであった。戦国時代は開門することが降伏の印であった。しからば 戦国時代はどうやって休戦交渉をしたか。司馬遼太郎氏によると陣笠を槍の先につけて振ったようである。このようなことを歴史家は誰も知らない、物語作家が知っていることだ。沖縄の白旗の少女についてだが、琉球大学で集中講義をしたことがあり、そのとき、そのご当人が聴講していたので確認できた。壕の中で日露戦争に従軍した祖父の体験として教えられたという。日露戦争は国際法に則った文明国の戦争であったので、休戦の交渉にはしばしば白旗が使われたそうである。

北方領土問題は幕末の領土交渉に始まる。これはあくまで外交交渉であったので、戦争による国境の決定とは意味が違う。したがって、北方領土問題は、幕末の日露和親条約に遡るべきだ。（国境はウルップ島と国後島の間で確定した。）

日中関係の現状を見るにつけ、政治家や、外交官に歴史を教えていないことに問題があると思われる。日中戦争の原因は対支二十四ヶ条要求に遡る。これは中国にとって大変屈辱的な要求であった。国家をどう作っていくかは、それを支える国民をどう作るか、即ち、教育の問題である。不磨の大典とされた明治憲法は君主独裁に通ずるものがあった。大正四年の憲法改正論議に遡り、対支二十四ヶ条要求を考え直せば、これが侵略以外に何者でもなかったし、中国に五・四運動をはじめとする、ナショナリズムを起こした原因となったことがわかる。第一次世界大戦で濡れ手に粟の成果を享受したことが問題で、日本の奢りと傲慢はここに始まったといえよう。

（山田哲司）
（写真 岩崎洋三）


ブンブンミーティング

米欧回覧の会々員皆さまお待ちかねの

国際シンポジウム記録VTRテープ完成

全4日間のイベントを集約

著作　米欧回覧の会

米欧回覧の会

国際シンポジウム記録映像

編集　足立光正（メディア部会）

4日間にわたった、レセプションおよび国際シンポジウムの長時間記録を見やすい37分間にまとめました。

会員の皆さまに是非おすすめ致します。

定価1500円（送料込み1800円）

＊セミナー、公開フォーラムなどの全てを記録したオリジナルテープの貸し出しを行っています。視聴希望の方は事務局に問い合わせてください。

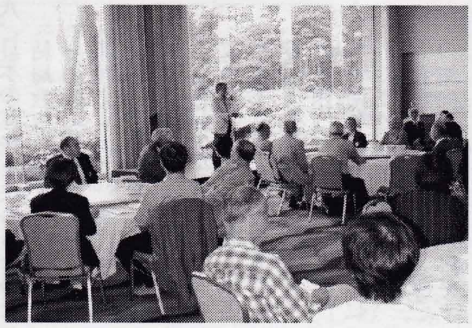
お申込みは右記へ

米欧回覧の会・事務局
電話：0426-46-3310　FAX：0426-45-8700
e-mail：info@iwakura-mission.gr.jp

八十二名の参加を得て充実
大磯歴史ツアー報告

恒例の国内歴史ツアー

米欧回覧の会では岩倉使節団ゆかりの史蹟を訪ねる旅を企画・実施しているが、平成十四年六月二十九日（土）には、大磯（神奈川県）の史蹟を訪ねるツアーを開催し、好評を得た。これは泉三郎、永富邦雄両氏の発案によるもので八十三名の参加者を得て行なわれた。



見どころの選定、コースの立案、訪問先との事前折衝、当日のご案内に至るまで関係者間で周到な準備がなされた。

さわやかな大磯で学ぶ

大磯はまた、日本の別荘地の中でも歴史が古く、海水浴を日本人の生活に定着させたレジャー地としても著名なさわやかな土地である。

ツアーは次のような順序で行なわれた。

一．午前十時三十分、JR東海道線大磯駅前集合。

二．駅前に設けられた「米欧回覧の会大磯歴史ツアー受付」で登録手続き。

三．そこからタクシーに分乗して行動を始める。旧吉田茂邸および七賢堂を見学。

四．次に滄浪閣（大磯プリンスホテル経営の中華料理レストラン）へ移動。ここで昼食をとりながら泉三郎氏、大久保利泰氏、伊藤博雅氏、永富邦雄氏の講話を聴く。

五．澤田美喜記念館へバスで移動。

六．澤田美喜記念館見学。

滄浪閣

滄浪閣は伊藤博文公の別邸で現在は大磯プリンスホテルの別館となっている。

吉田茂と七賢堂

旧吉田茂邸は吉田茂元首相の養父にあたる貿易商・吉田健三郎氏が明治十七年に建てたものである。第二次大戦後、吉田茂元首相が外国賓客を招くために新築、改築したもので、敷地一万坪余の中に住居、賓客室、七賢堂、庭園がある。現在では維持・管理を大磯プリンスホテルが行なっている。

七賢堂には岩倉具視、大久保利通、三条実美、木戸孝允、伊藤博文、西園寺公望、吉田茂の七人が祀られている。

大久保利泰氏のご指導により、二礼二拍手一礼の礼拝をすませたあと、ご説明を受け、堂内を参観した。

七賢堂

七賢堂の由来を説明される大久保利泰氏。背後は竹の林。奥深くつい。堂内には七賢人の肖像が掲げられている。

旧吉田邸拝見

おおぶりでのびやかな、いかにも風雅な兜門を入ると、晴れやかな広い庭があり、右手海側に心字池、左手山側に邸宅がある。通常は見学できないのだが、今回は大久保氏やプリンスホテルの特別のはからいで、内部をくまなく見せていただいた。それも、この邸宅を永年管理されている竹内さんの案内で拝見できたのはまことに幸せであった。

玄関を入ると右手に広い洋間の応接間、左手に賓客用の食堂ローズルーム、そして応接間の奥には階段があって二階の私室に通じている。それは広い座敷に四畳半ほどの角部屋が付属したユニークなつくりで、窓からの景観もよく掘り炬燵もあっていかにも居心地がよさそうだ。聞けば、側の袋戸棚にはホットラインの電話があったといい、なるほどと納得しながらも一瞬緊張した。特筆すべきは二階にある檜づくりの船形をしたお風呂で、そこから富士が眺められるという。ワンマン首相のお人柄や趣味がうかがわれて感慨深かった。

一階の食堂は壁が羊のなめし革の総革ばりで、蔣介石から贈られたという豪華な装飾付きの衛立がある。その奥には広いサンルーム「蘭の間」があって、熱帯植物の繁茂する中でくつろぎ歓談ができるようになっている。当日は富士の姿が見えなかったが、それぞれの部屋から富士が見えるように設計されているようだった。

文化勲章受賞の建築家、吉田五十八氏の設計である。

吉田茂像

吉田茂邸内にある銅像。目の前には大磯の海岸からはじまる太平洋。吉田茂はその先のサンフランシスコ（平和条約締結の地）を見ている。

滄浪閣ランチョンセミナー

次いで滄浪閣に移り、海に面したホールで、八十三名が揃って昼食をとった。ここでは、次の方々からのスピーチを聴いた。

泉三郎氏からは「大磯歴史ツアーの趣旨と見どころおよび史的考察」、大久保利泰氏からは「四賢堂から七賢堂へ」、伊藤博雅氏からは「伊藤博文について」、永富邦雄氏からは「明治から昭和へ」についてそれぞれ講話を頂いた。

会場のご参加者の質疑に応答を得るうちに、大磯町長がご挨拶に見えてスピーチをされるなど、充実したランチョンセミナーとなった。

澤田美喜記念館

かくれキリシタンの研究とキリスト教への信仰、エリザベスサンダーホームという戦争孤児の救済博愛事業に一生を捧げた、澤田美喜の記念館。

澤田美喜記念館

大磯歴史ツアーの最終コースは澤田美喜記念館である。

ここは、エリザベスサンダースホームの主宰者として、戦後、日本聖公会の精神で養護を必要とする児童を育成する偉業を残した澤田美喜氏を記念する文化施設である。内容はかくれキリシタンの資料が数多く展示されている。

ここでは館長のご懇切なご説明を一時間あまりにわたって頂いた。

尚、二次会が大磯町内の旅館で開かれ、二十二名が参加し、大いに懇親を深めた。

国際交流部会
山田哲司、浅沼晴男

大内館

希望者22名は２次会を開いた、会場の大内館は大磯で有名な老舗の旅館。

（大磯ツアー写真撮影 岩崎洋三）

七賢堂の由来と吉田茂翁

永富邦雄（会員）

「七賢堂」の名前を知っている日本人は、銀行の普通預金金利の利率よりもっと低い水準では無かろうか。

そもそもは明治三十六年、伊藤博文公が大磯の家敷内に、維新の中心人物で、且つ自分より先輩で薫陶を受けた三条実美、岩倉具視、木戸孝允、大久保利通の四氏の偉勲を称えるためお堂を造り、内に肖像を掲げ「四賢堂」と銘名した。

当時大正天皇が東宮時代にしばしば大磯に行啓され“四賢堂”の三文字を大書して賜り、これを堂内南方の壁に額として掲げられた。さらに北壁には書家三島中州の「四賢堂歌。應春畝伊藤候微」の漢詩が掲げられていた。しかし残念ながら現在はこの二点は所在不明。

その後伊藤公が暗殺され、梅子未亡人が亡き夫を祀り五賢堂となった。又大正の初め屋敷は李王家に譲られたが、大正十二年の震災で倒壊全焼した。庭先の五賢堂は難を免れたものの、伊藤公亡き後は話題になることもなく「知る人ぞ知る」で一般の人には無縁の存在となってしまった。

さて戦後は、屋敷が幾人かの人手を転々としたが昭和三十五年四月、無事同じ大磯の吉田茂邸内に遷座することができ、今日に至っている。この間牧野伸顕（大久保利通の次男）が伊藤公の末子伊藤真一氏に引き取り方依頼されたが実現せず、昭和三十三年頃伊藤公の孫に当たる藤井清子夫人が吉田邸を訪れ翁に「五賢堂が旅館（西武グループの所有となっていた）の片隅に朽ち果てかけているので何とかしていただきたい」旨陳情した。（私はたまたまこの時同席していた）

吉田茂翁は熟慮の結果、伊藤公の後継者と言われていた大正・昭和の重臣西園寺公望公をも合祀し六賢堂とし、自分の邸内に転座した。吉田翁は個人的にも西園寺公に対し畏敬の念を持ち、また数々の薫陶を受けている。例えば、こんな話が伝わっている。松岡洋右外相が国際連盟を脱退の意思を固めた頃、吉田翁は「自分は反対である」いう意見を進言した。公は徐に「貴方のお説は抽象的には賛成、具体的には反対である」と言われ、何の事かと怪訝な顔をしていると、急に厳格な口調で「かかる國事の重大事を論ずるに一身を賭す決意なからずべからず。貴方にその決意ありや」と聞かれ思わず襟を正した、と翁は述懐している。

昨今の政治家に聞かせたい話である。

翁亡き後佐藤栄作首相の計らいで故人を合祀し「七賢堂」とし、毎年伊藤公の命日（十月二十六日）前後に旧吉田邸で七賢堂祭を行うこととなった次第である。

国際シンポジウムの記録出版、順調に進行中

昨秋の国際シンポジウムの全記録については、二日間のセミナー、三日目の公開フォーラムでの全発言を録音から原稿に起して編集、京都の思文閣出版から出版の予定で作業を進めている。編集してみて、改めてなかなか内容の濃いシンポジウムであったことに編集委員として感銘を受けている。

すでに初校ゲラが出て、編集委員および出版社側の校正が終わり、あとは最終的な著者校正や、台割り、口絵編集を残す段階となった。いわば追い込み態勢である。この分で行くと、多分十一月いっぱいには、本の形になるだろうと予想している。いよいよシンポジウムの全貌を世に問う日も近いということになった。会員の皆さんも楽しみにお待ちいただきたい。

（水澤周）

国際シンポジウム・セミナー会場

メディア部会新設

スライドやビデオなどの映像製作・上映会、ホームページの開設・運営そしてニュース編集と、当会の各種のメディアは全て会員の手作りで行なっています。そこで、映像グループとインターネット部会が一緒になり、それにニュース編集を加えた「メディア部会」として、一貫した考えのもとに連携して取り組むことになりました。

各メディアの位置付けと方針は以下の通りです。

①会員対象の**ニュース**

②会員および実記や岩倉使節団に関心をもつ人々を対象にした**ホームページ**

③広く外部に発信するスライドやビデオなどの**PRメディア**

当面の課題は、ようやく形が整いつつあるホームページの充実です。これを機に、**ホームページ編集に関心のある方の参画を切望いたします。**詳しい内容は、幹事の中山まで問い合わせください。

（連絡先は下記）

FAX（03-3705-8567）　MAIL（s-nkym@kt.rim.or.jp）

実記を読む会の現況

連絡　クラウンインターチェンジ

Tel 03-5469-2090 Fax 03-5469-2093

info@crown-interchange.com

■七月例会報告

七月四日に開催された「読む会」は、実記第一編第三巻「桑方斯西哥（サンフランシスコ）ノ記上」から読み始めた。ここは岩倉使節一行が二十五日間にわたり太平洋を航海し、初めて米国サンフランシスコに入港する感激的な場面から始まる。久米邦武が、お得意の漢文調の記述で情景を描写していて、この名文の音読を希望する方が次々と現れて活気のある会となった。

次に東洋・西洋の風俗性情の比較を久米が述べた箇所を音読し「西洋人ハ外交ヲ楽ム、東洋人ハ之ヲ憚ル」とか、「西洋人ハ外ニ出テ盤遊ヲ楽ム（中略）東洋人ハ室内ニアリ惰居スルヲ楽ム」などと記述した久米の観察に対して、出席した会員の中から賛否両論が出て活発な意見交換が行なわれた。会員の中には外国に長期間滞在された方が何人も居られ、ご自身の体験に基く東西比較論の披瀝などもあり、賑やかな中にも実り多い集会だった。

■九月例会報告

九月十二日に開催された「読む会」は実記を読み進む形態から一寸離れて、実記の中に出てくる「鉄」について、会員の室賀脩氏の研究発表を聴講することにした。

室賀氏は四十年近くにわたり日本有数の製鉄会社に勤務された経験を踏まえて、鉄の歴史や製鉄技術の発達史に加え、学生時代や会社勤めにおけるエピソードなどを混えて、鉄に関する蘊蓄を傾けて二時間近く話された。

聴講した会員は、元文学少女の専業主婦や大学で機械工学を専攻したエンジニアなど実に多種多様であり、室賀氏はどこに焦点を絞ってどのような表現を用いたら良いのか、さぞかし苦労されたことと思う。冒頭、口にされた「難しいことを易しくお話しするのは大変難しいものでして！」のセリフにも室賀氏の気持ちが表れていた。

実記第二編には、使節一行が当時世界のトップを占めていた英国の製鉄業に注目し、リバプール、マンチェスター、グラスゴーなどの各工場を精力的に観察した様子が、久米の緻密な観察と正確な表現力によって活き活きと記述されている。

当時の英国は、ベッセマー転炉の採用など先端技術を駆使し、製鉄業において世界をリードするとともに、品質の優れた鉄鋼を使用して強力な大砲を製造したり、鉄軌道や蒸気車等を製作し、国内のみならずヨーロッパ各国に輸出するなど、まさに「世界の工場」の名に値する程の大活躍をしている。

久米も第二十七巻「里味陂府（リヴァプール）ノ記　下」の巻末に「鉄ノ利タル真ニ無量ナルカナ」と、その感慨を記している。

室賀氏は研究発表の総括に当って「フランスは、一八六七年のパリ世界博に、ピエール・マルタンが平炉法による鋼製品を出品し、世界を驚愕させて、ということになっているにも拘らず、使節一行が仏蘭西訪問の際、製鉄工場および伝統ある大砲製造見学をしていないのは不思議である」と専門家らしい疑問を呈した。

（正木孝虎）

（写真 岩崎洋三）

室賀脩氏

現未来部会・会合で報告

「シニアボランティアの体験から、バンコクでの一年間」

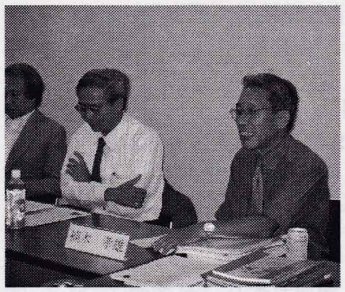
当会会員の楠木孝雄氏は、昨年四月からJICA（国際協力事業団）のシニア海外ボランティアとしてタイのOCSCに派遣され「賃金調査コンサルタント」として一年間、公務員給与改定のための賃金調査アドバイスなどの仕事をされた。その体験報告を、九月十三日の現未来部会の会合（国際文化会館）からリポートする。

楠木氏は先ず、シニアボランティアの意義と現地での仕事の概要を紹介した。シニア海外ボランティアは、四十才～六十九才の人材を三十数カ国に派遣しているが、その過半数が六十才以上である。OCSCは首相直轄の「行政委員会」事務局で、公務員採用人事管理、行政組織制度、国費留学生管理などを担当し、七百八十三人の職員の七十五％は女性である。

企業経営手法の導入による行政の効率化を唱えるタクシン政権の成立直後の時期であり、上層部から「日本のことは何でも質問しろ」と言われたキャリアらから、回答に窮するような各種の質問を受けた。その内容を紹介しつつ、タイのおかれている状況、タイ人の生活や特性、そしてアジアにおける日本のあり方にまで触れた、奥深くかつ楽しい会合であった。

楠木氏は、バンコク日本人商工会議所機関誌への寄稿のあとがきで「組織全体が省局再編という大きな行政改革作業に巻き込まれていくのを目撃することになった。（中略）顔見知りになった中堅官僚たちが、イキイキとした表情で忙しく動き回るのは、見ていて楽しかった。」と述べている。

（中山進）



報告する楠木氏（右端）

現未来部会の現況
連絡　塚本 弘
Tel 03-3211-2765 Fax 03-3213-1371
h-tsukamoto@jeita.or.jp

■集会報告

二〇〇二年七月十日（水）、プレスセンターに、おりからの台風による強風雨にもかかわらず十二人が参加して、午後六時三十分から会合が開かれた。

「オランダモデル・制度疲労なき成熟した社会」（財政経済新聞社）の著者、長坂寿久・拓殖大学国際開発部教授を講師に招き「政府・企業・NGO（NPO）の協働に向けて」をテーマに議論した。

長坂氏は、政府（行政）、NGO（NPO）、企業、の三者が対等のパートナーシップでコンセンサスを作って運営していくことは、二十一世紀の経済社会システムの一つであり、民主主義を補完するものとして段々と形が見えてきたという。その三者が対等のパートナーシップで合意を作って運営してきた国がオランダで、その仕組を「オランダモデル」と定義したあと、報道では取り上げられることのない諸外国の実例や現状を語った。

始めに、政府と企業（建設会社やスポンサー等）とNGOの三者が最初から対等のパートナーシップで話し合って作り上げ、「グリーンゲーム」と呼ばれている二〇〇〇年のシドニーオリンピックの、詳細な合意形成の過程および成果と課題を紹介し、国際イベントでは三者が最初から話し合って進めるというのが既に国際スタンダードになっていると指摘する。

更に、二十一世紀においては、イベントのみならず民主主義を補完するシステムとして各国の経済・社会システムの運営も同様の仕組になっていくとする。そのモデルとして、オランダの経済政策、環境問題、ODAから麻薬、飾り窓や安楽死に至るまでの独特の仕組を一貫したものとして説明する。

最後に、NGOの限界と役割を整理した上で、コンセンサスとは多様性を認め合うということであり同じ意見になることではない。日本でNPOが進展しないのは、日本人にボランティア精神がないとか公益精神がないのではなく、明治以来の社会システムの問題であるとして講演を締めくくった。

続いて質疑応答に移り、NGO（NPO）の審査、評価の基準についてやワークシェアリングについてなど多くの参加者が議論を尽くした。

（議事録より）

関西支部の現況
連絡　山崎 岳麿
Tel&Fax 06-6853-3137
takechan@tcct.zaq.ne.jp

■例会報告

八月七日、十六名の賑やかな集まりとなる。今回はイタリア編に入る。

二千年前と当時の欧州とを比べての感慨は現在も同じ。今から二千年後、其の時代の人（果して人類が生き残っているのかどうか）は何をどう見るだろうか。ヴァチカン博物館、今でも一行の見た同じものが、同じように置いてある。当時パンフレットも何もなかったのによく覚えて記録したもの。カタコンベではキリスト教を仏教と比べて、死を恐れない不撓を称えているが、最後の所では厳しくローマ法王の権勢を批判している。そしてローマをヴァチカン支配から切り離して王国に組み入れた、明治初めによく読まれた「佳人の奇遇」という政治小説に登場するガリバルジーを称えている。クリスチャンの方が三人おられ、教会への寄付のことその他について、それぞれ発言があって、宗教を話題にする。アメリカの「神のもとに」という言葉を使っての国民国家化も話題になる。（山崎）

「米欧回覧の会」ご案内

趣　旨　この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この大いなる旅と「実記」はまさに「温故知新」の宝庫と言えましょう。
この素材を媒体にして歴史をふりかえり現代の直面する諸問題についても自由に語りあおうという会です。

会　員　上の趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例　会　年に4回くらい全体例会をもちます。

分科会　テーマ別にグループ活動をします。映像サロン・勉強会・旅行会・研究会・シンポジウムなど。

機関紙　年に4回程度機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

幹　事　会員の中から、代表1名、幹事十数名を選び、運営を担当します。

会　費　年会費5,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・分科会・講演会などについては、その都度の会費とします。

事務局　当面「イズミ・オフィス」に置きます。

〒192-0063 八王子市元横山町1-14-16
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:0426-46-3310
FAX:0426-45-8700

入会申込

氏名・連絡先(自宅或いは勤務先の住所・TEL・FAX)現職&キャリアを事務局までFAXまたは郵便でお送りください。なお年会費は郵便振込が便利です。

00180-2-580729　米欧回覧の会

＜催し案内＞

2002年10月～12月の予定です

☆12月全体例会

日　時：12月7日（土）13：00～16：30
場　所：日本プレスセンター10階ホール
テーマ：ハーバート・ビックスの「昭和天皇」をめぐって
講　師：ジョージ・秋田氏
（ハワイ大学名誉教授・歴史学）
構　成：一部／例会、会務報告
二部／講演とブンブンミーテイング
会　費：２０００円
懇親会：17：00～19：00（忘年会も兼ねて）
聘珍楼　（隣接の富国生命ビル２８階）
会費　６０００円の予定

☆実記を読む会

10月3日（木）　藤原宣夫氏「貿易論」
11月7日（木）　金鉱・インディアンについて
12月5日（木）　西井易穂氏「医療論」
場所；いずれも
南青山クラウンインターチェンジ内サロン
電話　03－5469－2090

☆ニューヨーク「時事トップセミナー」

日　時：11月8日（金）17：00～19：00
場　所：ニューヨーク、日本クラブ
講　師：泉三郎氏
テーマ：岩倉使節団とその今日的意義
主　催：時事通信社（公開の予定）

☆関西支部例会

日　時；11月19日（火）
場　所；大阪凌霜クラブ会議室
問い合せは山崎まで（Tel・Fax：06-6853-3137）

・・・・ホームページのご案内

◇米欧回覧ニュース第1号からのバックナンバー
◇会の催し・部会活動の速報
◇＜群像＞岩倉使節団とその周辺（パネル30枚）
◇インターネットサロン（会議室）など

＊皆様のご意見をお聞かせ下さい
（ホームページ編集に関心のある方歓迎します）

http://www.iwakura-mission.jp

編集後記

◇足立さんの奮闘により、三十七分に短縮された国際シンポジウムの記録ビデオが、七月例会の当日、会場に持ち込まれました。

ところが、機材が事前確認とは異なる状態になっていたため、どうしてもスクリーンに映らず、上映は終了後の懇親会のみとなってしまいました。素人集団が扱うには立派すぎる学術総合センターの設備にいつも泣かされます。

ビデオはその後、更なる修正を加えた最終版がついに完成し、当会の実績を内外に示す媒体として報告書出版に先駆けて頒布できるようになりました。

◇昭和十九年秋から二十二年秋までの敗戦前後の日本人を活写し、多くの書評で賛辞を得ている小説「八千代の三年」（風媒社）は、当会会員の水澤周さんの著作です。

原爆投下の結末（始原）という一瞬に時間を歪めがちですが、いかなる時代でも真っ当な時間の流れの上に未来があります。戦後生まれにとっても、小説の時間を現在として感じることができる、貴重なノンフィクションです。（N）